

熊本放送

活動名	RKK “一步にエール” お話し会
実施期間	令和5年 11 月～令和6年3月
実施回数	会場 3 回（うちオンライン同時配信 1 回）
ネット配信期間	令和 5 年 12 月～
ネット配信作品数	2 本

【事業実施の成果・課題】

今年度の事業実施において運営上のトラブルなどはなく、実施会場においては概ね好評をいただきました。朗読に際しても、言葉遊びなどプラスαのコンテンツに対しても子どもたちの反応は良く、活動の目的に照らしても、一定の成果を得られたものと考えます。

来年度以降も読み聞かせ事業の継続を希望していますが、今後の課題として以下の点が見えてきました。

- ①実施校・学年の多様化
- ②朗読作品のバリエーションを増やすこと
- ③担当アナウンサーの多様化

これらは連動していて、①が達成されれば自ずと②も達成されるという構図ですが、来年度以降は、この3点を意識して取り組みたいと考えています。

【事業担当者およびアナウンサー（講師・読み手）の感想】

<吉田明央アナウンサー>

コロナ禍でフェイスシールドを着用して読み聞かせをする、子どもたちの触れ合いは禁止など、条件付きでの開催を経験しました。5 類移行後、制限がない中での開催できるというだけで高揚感がありました。特に、熊本学園大学付属敬愛幼稚園では、所々で子どもたちにも一緒に声を出して一節を読んでもらうこともし、その場に一体感を生み出すことができ、子どもたちの満足につながったのではないかと感じています。

また、熊本大学附属特別支援学校では「発語訓練をしている児童もいるので、学びになった」との言葉をいただきました。目標としていること以上の意味・意義を生み出すことができたのではないかと、嬉しく思っています。

<福居万里子アナウンサー>

熊本学園大学付属敬愛幼稚園での言葉遊びは、同じ発音でもアクセントによって異なるものを指すことがあるという日本語の面白さ、難しさに気づいてもらうきっかけになればと思い構成しました。一方で、くも：「雲」と「蜘蛛」、はな：「鼻」と「花」のように、アクセントも同じことばでも異なるものを表すこともある...じゃあ、どうやって相手に正確に伝えようか？ と一緒に考える時間をつくりました。

「蜘蛛」という言葉を、両手を開き、蜘蛛の怪しい足の動きを指で表現する男の子を発見！急遽、壇上に上がってもらい、子どもたちに披露してもらうとみんなすぐに「蜘蛛だ！」と歓声があがりました。

こうしてリアルで触れあい、双方向の交流をすることは、子どもたちにとってはもちろん、私たち放送局員にとっても学びの多い、豊かな時間であると改めて感じました。

＜坂本くるみアナウンサー＞

特別支援学校に通う児童たちの中には発語が苦手な子どももいて、絵本を読むことで楽しんで練習をしてくれるということでした。教員の方からも「すごく有効だ」と喜んでいただき、教員免許を持つアナウンサーとして、一つ、学校現場に貢献できたような気がして嬉しかったです。今後もこのような機会を増やしていけたらいいなと感じました。

【教諭・保育士・子どもたち・視聴者などの感想】

＜熊本学園大学付属敬愛幼稚園 教諭＞

読み聞かせの本は 2 冊ともとても面白く、子どもたちも飽きることなく楽しんでいました。特に、「うそだぁ！」は、お話し会終了後から、子どもたちの流行語になっております。

＜熊本学園大学付属敬愛幼稚園 園児＞

「面白かった」「また来てね」「ロアッソ熊本の応援に行くね（アナウンサーの仕事紹介に対して）」など、会場から教室へ戻る際にわざわざ声を掛けに来てくれた子どもたちが多数。

＜熊本大学附属特別支援学校 教諭＞

発語訓練を頑張っている子どもたちもいるので、朗読をしてもらった作品そのものも参考になるものであったし、アナウンサーの方々が日頃どんな発声・発音練習をしているのか話も聞けて参考になった。子どもたち、教職員ともに学びの多い時間になりました。

＜熊本大学附属特別支援学校 児童＞

6 年生なので、最後に楽しい思い出ができた。来てくれてありがとうございました。僕たちが卒業したあとも、また来てください。